

氏名	安藤 さやか
ヨミガナ	アンドウ サヤカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第520号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 《コルビー詩編》のイニシアル--カロリング朝期写本画に於ける図像と装飾の研究--
	〈作品〉
	〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	田辺幹之助
(論文第1副査)			()	
(作品第1副査)			()	
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	越川 倫明
(副査)	東京藝術大学	名誉教授	()	越 宏一
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	佐藤 直樹
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

9世紀初頭、カロリング朝フランク王国では〈Renaissance再生〉或いは〈Renovatio刷新〉と呼ばれる文化復興運動が勃興し、ローマ帝国の再興を表象する新たな芸術が、カール大帝の宮廷を中心として推進されていた。この時期にコルビー修道院で制作された詩編写本《コルビー詩編》(アミアン市立図書館、Ms. 18)には、各編冒頭を強調するイニシアル装飾が計156点現存している。それらは、インスラー(島嶼)写本に由来する幾何学文や動物文、メロヴィング朝写本に典型的な鳥魚文といった、先行する写本芸術から継承した装飾モチーフだけではなく、詩編の内容を喚起させる図像をも豊かに備えている。この多様な装飾語彙と物語図像との共生という点で同写本は、カロリング朝美術の中で特異な地位を占めている。本博士論文は《コルビー詩編》の包括的な研究として、イニシアルに於ける図像と装飾との由来と融合の過程を明らかにすることで、同写本の美術史的位置付けを再考するものである。

第1章では、本写本についての写本学的基礎情報を、関連する写本の実見調査からの知見を踏まえて再検討し、更に、制作地であるコルビー修道院の歴史的環境について考察を行った。同修道院は、メロヴィング朝期の創設当初からカロリング朝期にかけて、膨大な数の写本の制作・所蔵を誇り、宮廷の知識人らと交流を持つフランク王国有数の知的中心地であったことから、本写本の制作者も、帝国内外からの写本芸術や工芸作品を手本としえただろうと推定される。

第2章は本作品に関する研究史の概観と問題提起に充てた。先行研究では様式論と図像学の双方から検討が行われ、本作品の様式には主に二つの、一見すると互いに矛盾する解釈が与えられてきた。即ち、カール大帝の宮廷派絵画を当時の芸術的動向の主流と見なし、本作品をケルト=ゲルマン系民族という所謂「バルバロイ」による、反古典的な「プレ=カロリング」の芸術とする解釈と(PORCHER 1957; PÄCHT 1963/1984)、異質なもの同士の統合というカロリング朝芸術の特徴に照らせば、文字と図像との融合という点で、本作品は典型的なカロリング朝芸術だと見做す解釈である(KUDER 1977)。他方、図像と詩編テキストとの照合に基づいた図像研究が行われたが(PORCHER 1957/1967; KUDER 1977/1993)、一部のイニ

シアルについては図像の主題についての議論が分かれたまま、近年では詩編の朗読に際する瞑想や不可視のもの、視覚化といった点にその重心が移行している（BESSETTE 2005; PULLIAM 2000/2010）。これらの従来の研究に対し本論文では、文字の中に挿絵を組み込む「物語イニシアル」という挿絵形式に着目し、様式と図像の性格を、文字装飾の伝統から考察することを課題とした。

この問題提起を受けて第3章では、本写本のイニシアルの造形的特徴を論じた。本写本のイニシアルは装飾と図像の比類無き多様さの為に、同時代の他の写本芸術からは断絶した作品と見做されてきた（KOEHLER 1972）。しかし作品を具体的に観察すると、本作品は装飾形式に於いて、インスラー写本とメロヴィング朝写本という二つの潮流を継承していることが分かる。特にノーサンブリアと、フランク王国の中心部であるネウストリア東部からアウストラシア西部に跨る地域に由来する8世紀写本のイニシアルには、モチーフや文字の構成方法という点で類例が多く見られる。またコルビー修道院に由来する写本のミニアチュールを見ると、同修道院内の写本芸術が本写本のイニシアルの前提となっていたことを確認出来る。但し先行する時代の作例と比較すると、本写本のイニシアルでは人物像や動物などのモチーフが量感を獲得し、有機的身体表現への志向が観察される。一方、カール大帝宮廷派やメッス派写本のイニシアルと比べるならば、本写本では文字に対して一つのモチーフが大きく表されるという、本作品の造形的特質が明らかになった。

この考察結果を踏まえ第4章では、物語イニシアルの図像の生成過程を観察した。本作品の物語イニシアルには、1) 新旧約聖書の物語場面を主題としナラティブな図像を示す説話的物語イニシアル、2) 聖書の特定の箇所のみを典拠とせず、教父らによる注解などのテキストを介し、複数の主題を合成して詩編内容を暗示する象徴的物語イニシアル、3) 祈りや祝福の行為を表すイニシアル等が含まれる。手本として想定されるのは、ビザンティン写本を含めた詩編挿絵のみならず、福音書や黙示録といった聖書主題の写本画や象牙浮彫、或いはカロリング朝期に再発見された古代末期の博物誌テキストの挿絵に見られる図像である。これらの図像伝統と比較すると、本写本の物語イニシアルには次のような性格が観察される。まず、動物や人物像等の個々のモチーフを縮小することなく文字の形状に適合させる為に、図像伝統からの副次的モチーフの省略が見られること。次に、文字の構成方法が主題やモチーフの決定要因の一つとなり、新たな図像を創造する契機となっていることである。本写本には、図像をイニシアルに移植する際に、文字の形状に動機付けられて図像の改変が行なわれる、装飾形体の優位という原理が認められるのである。

《コルビー詩編》のイニシアルは9世紀初頭という時代にあつて、具象的モチーフが量感を獲得し、帝国内外から収集された古代末期写本や工芸から豊かな図像世界を取り入れているという点で、確かにカロリング・ルネサンスを内包している。しかし同時に、インスラーやメロヴィング朝の文字装飾の伝統を前提とし、文字の形状という要請に従った図像伝統からの逸脱を示している点で、バルバロイ的な造形感覚に基づいている。本写本のイニシアル芸術は、カロリング朝期に於ける古代の再生という刺激が、その前夜まで発展を続けていたバルバロイと呼ばれる芸術を必ずしも断絶させるものではなかったことを示している。それは、ケルト=ゲルマンの装飾芸術の原理に基づいた、古代末期から初期キリスト教時代の図像の再解釈だったのである。

（論文審査結果の要旨）

申請者安藤さやかさんは、本学の越宏一名誉教授のもとで卒業・修士論文を、さらに私の研究室で博士論文を執筆した。対象に取り上げたのは一貫してカロリング朝期に北部フランスのコルビー修道院で制作された詩编写本、通称《コルビー詩編》（アミアン市立図書館、Ms. 18）の挿絵である。同写本にはイニシアル装飾156点が収録されており、カール大帝の宮廷を中心とする古代復興運動が推進されていた時代にあつて、それ以前のインスラー美術やプレ・カロリング朝写本の影響を濃厚に残す特異な造形によって知られている。しかし美術史上の位置付けに対しては諸説があり、その評価についても必ずしも明確にされてはいない。本論文は、同写本のイニシアル装飾の図像源泉と装飾形態を具体的に体系的に調査・分析することによって、9世紀初頭のカロリング朝美術および中世写本画の歴史におけるその意味を明

らかにする、包括的な研究である。

論文は4つの章によって構成されている。第1章では《コルビー詩編》の写本学的な記述と同写本が制作されたコルビー修道院を巡る制作環境の調査に充てられている。そこで申請者は、コルビー修道院がカロリング朝期のフランク王国にあって、ローカルで周縁的な修道院なのではなく宮廷とも密接な関係をもつ有数の知的中心地であり、コルビーの修道士は同写本の制作にあたって、そこに蓄積された、時代からしても地域からしても多岐にわたる作品を参照し得たことを明らかにしている。

続く第2章では研究史の整理と問題提議が行われている。《コルビー詩編》についてはこれまで図像学と様式論の2つの方向から研究が進められ、とりわけカール大帝の宮廷を中心として推進されたカロリング朝美術のルネサンス的な傾向との関わりを巡って、矛盾とも見えるような説が唱えられてきた。すなわち時代の主流に反するアナクロニズム的な造形であるという説と、過去のさまざまな造形を統合しようとするカロリング朝美術の典型的な作品であるという説である。近年の研究は、むしろ同写本の図像内容や主題の解釈について関心が移行しているが、これに対して申請者は、同写本の「物語イニシアル」という特異な挿絵形式に注目し、中世写本の特徴となっている文字装飾の伝統に即して体系的に造形分析を行うことにより、中世写本装飾の枠組みの中で再び同写本の位置を問い直すことを提議している。この問題提議は、研究史の中心的な議論に立ち返り、それに正面から取り組もうとする意欲的な試みであると言えることができる。

第3章では、この問題提議に即し、関連作品との具体的な比較考察が行われている。その結果申請者は、同写本のイニシアル装飾がカロリング朝美術に先立つインスラー写本とメロヴィング朝時代の写本の装飾形式を継承する一方で、有機的な身体表現や量感の獲得などに新たな時代の特徴が看取されることを指摘している。この比較考察の手続きは体系的・包括的なものであり、本章のみで500点を超える図版を駆使した緻密な考察は、十分な説得力を備えていると認められる。

第4章では、さらに同写本の図像の成立過程に関する調査が試みられている。古代末期やビザンチンにまで遡る、博物学写本や工芸作品を含む多様な図像源泉からどのように本詩編のイニシアル装飾が生まれたか、その生成過程に対して申請者は、図像の主題に関する伝統的な議論を踏まえつつ、緻密な考察を展開している。先行するさまざまな図像が文字形態に即して改編されるプロセスに着目し、同写本が、イニシアル装飾と言う新たな写本装飾の形態に即して、インスラー美術やメロヴィング朝写本などの非古典的な傾向を持つ造形を継承するのみならず、新たに古代末期やビザンチン美術に由来する図像をも取り込んでいることを明らかにしているのである。申請者はそこで同写本が、時代からしても地域からしてもさまざまな源泉に由来する図像を融合する、その総合的な性格によってまぎれもなくカロリング朝美術の重要な側面を示すものであると結論づけている。

本論文にはさらに《コルビー詩編》の図版カタログと精緻な関連資料が別冊にまとめられている。これは申請者の《コルビー詩編》に対する多年にわたる継続的な調査の成果であり、膨大な資料を体系的に整理し入念な考察を加えた研究である。同写本に対する基礎的な論考として、これ以降の研究に対して多大の貢献を行うものと思われる本論文は、学位申請論文として十分な要件を満たすものと評価される。